『民衆の秘密』のヴィジョン

渡部　望

『パリの秘密』（1842-43）と『さまよえるユダヤ人』（1844-45）によって，大衆小説家としての名声を確立したウジェーヌ・シューは，1848年の二月革命以降，積極的な政治活動に身を投じる。次々と政治的パンフレットを発表する一方，1850年には山岳党の推薦を受けて立憲議会の補欠選挙に立候補し，当選している。だがその翌年12月，ルイ・ナポレオンのクーデタによって彼は国外逃亡を余儀なくされ，当時サルディニア王国の領地であったアヌシーに逃れ，そこで亡命生活を送った末1857年に死亡する。

12巻，18章から構成される『民衆の秘密』*Les Mystères du peuple*[1]はシューがこの政治参加と亡命生活のなかで執筆した，最後の作品である。第１巻は1849年12月に発表され，最終巻は８年後の1857年，シューの死後に出版された。これは副題Histoire d'une famille de prolétaire à travers les âgesが示すように，あるプロレタリア家族の歴史，しかも紀元前57年から1850年までの1900年間の歴史を物語ろうという壮大な意図を持った作品である。シューはミシュレやギゾー等の歴史書からカエサルの『ガリア戦記』，プリニウスの『博物誌』に至るまでの膨大な歴史資料を渉猟し，縦横に利用しながら，フィクションとしてのフランス史を構築したのである。

人類史を固有のヴィジョンのもとで再構築という試みは，この時代に特徴的なものである。その意味で『民衆の秘密』はミシュレの『フランス史』やユゴーの『諸世紀の伝説』と同じ野心を共有するものだといえる。このフランス史のversion feuilletonesqueはどのようなヴィジョンを展開しているのだろう。

I

第１章の舞台は1848年，二月革命前夜のパリである。織物業を営む主人公Marik Lebrennは密かに翌日の蜂起の準備を進めている。彼は二月革命の成功を見るものの，六月暴動の混乱に巻き込まれて徒刑場に送られる。革命の騒乱のさなかで命を救った竜騎兵Plouernel伯爵の口添えによって翌1849年に釈放され，パリへの帰還を許された彼は，先祖代々の習わしにしたがって，長男Georgesの21歳の誕生日に，家族を秘密の部屋に導き入れる。そこにはLebrenn家の先祖が紀元前57年以来，途切れることなく書き綴ってきた記録と，それぞれの時代を象徴する遺物が保管されている。家長Marikはその記録を皆に読んで聞かせる。作品全体はMarikの朗読によって

進行するのである。

最初の記録（第２章）の著者Joelはカルナックに住む一族の族長brennである。彼は勇敢でしかし信仰心と友愛とに満ちたゴール人たちの平和な生活を描き出す。だがその平和はカエサル率いるローマ軍の侵略によって破壊される。ここからゴール人の悲劇が始まる。Joelの子孫たちはローマ人の奴隷となる。ローマに連れていかれた者たちはゴール人解放を目的とする秘密結社Enfants de Guiを組織し反乱を起こすのだが，失敗に終り処刑される（第４章）。また別の子孫は，ユダヤの総督ピラトの奴隷としてエルサレムに赴き，そこで被抑圧民の解放を説く，ナザレのイエスの死を目撃する（第５章）。その後ゴール人はローマからの独立を徐々に獲得していくが，今度は北から新たな制服者，フランク族の侵略が始まる（第７章）。フランク族はまず軍事的支配者として君臨し，次に貴族，政治的支配者として平民，農民のゴール人を隷属状態に置く。さらにカトリックの司祭たちはゴール人の精神的支柱であるドルイド教の信仰を廃絶し，精神的な支配を謀る（第11章）。その後，16世紀の印刷工，17世紀の農民，フランス革命期のサン＝キュロットなどLebrenn家の子孫たちは様々な機会を捉えてゴール民族独立の戦いを繰り返すが，そのことごとくが挫折に終る。その失敗の背後には，フランク族の末裔，Plouernel家の陰謀が存在する。10世紀に始まるPlouernel家とLebrenn家の敵対関係は19世紀まで続き，1848年の二月革命の戦いのなかでも両家の子孫がバリケードを挟んで対峙することになる。

Marikの朗読は1850年12月１日，つまりルイ・ナポレオンのクーデタの前日におわる。主人公Marikは作者同様，クーデタによってパリ脱出を余儀なくされるのである。

II

物語の合間に挿入された「読者への手紙」のなかで，シューはこの作品の主題について次のように述べている。

> Jusqu'ici (sauf quelques-uns des éminents et modernes histoiriens déjà cités dans les notes), l'on avait toujours écrit l'histoire de *nos rois,* de leurs cours, de leurs amours adultères, de leurs batailles, mais jamais notre histoire à nous autres bourgeois et prolétaires; on nous la voilait, au contraire, afin que nous ne pussions y puiser ni mâles enseignements, ni foi, ni espérance ardente à un avenir meilleur, par la connaissance et la conscience du passé. C'a été un grand mal, car plus nous aurons conscience et connaissance de ce que nos pères et nos mères ont souffert pour nous conquérir à travers les âges, pas à pas, siècle à siècle, au prix de leurs larmes, de leur martyre, de leur sang, les droits et les libertés consacrés, résumés aujourd'hui par la

souveraineté du peuple écrite dans notre Constitution, plus les droits, plus les libertés nous seront chers et sacrés, plus nous serons résolus de les défendre! [2)]

シューは，これまでの歴史家が王や宮廷の歴史の記述に終始し，「われわれ，ブルジョワとプロレタリアの歴史」を隠蔽してきたことを批判している。では隠蔽されてきた歴史とはどのようなものか。それは，フランスの先住民族，ゴール人の苦難の歴史であり，侵略者ローマ人，フランク族，カトリック教会の抑圧にたいする抵抗の歴史である。明らかに，シューは二月革命をめぐってたたかわれている戦いを，ゴール人とフランク族とのたえざる戦いの延長線上に位置づけようとしているのだ。ところで，フランス史を支配者フランク族と被支配者ゴール人の人種的な対立（シューはraceという言葉を使用している）の歴史として捉える歴史観は，彼の独創ではなく，Augustin THIERRY, Amédée THIERRY, François GUIZOTといった同時代の歴史家から借用したものである。少なくとも今日のわれわれにとって，これは荒唐無稽な仮説でしかない。だが，初期資本主義社会のなかで，富者と貧者とのあいだの溝がますます乗り越えがたいものとして目に映っていた当時の人々にとっては，ある種の説得力を持っていたものと思われる。「階級間の闘争」という概念をまだ知らないこの時代が，目に見えない社会構造の「秘密」を，漠然と「人種間の戦い」のなかに読み取っていたことは十分想像できることではないだろうか。事実，金融貴族にたいする反感がすでにユダヤ「人種」にたいする攻撃的言説で表現されてもいたのである[3)]。

シューはこのような歴史観を『民衆の秘密』の骨格とすることで，これまで以上に急進的な立場に踏み込んだように思われる。民衆と政治的支配者との対立が宿命的な「人種」間の対立であり，和解が不可能なものであるとすれば，民衆の解放は特権者の博愛的行為によってではなく，民衆自身の手によってなされねばならなくなる。この作品のすべての巻には，« Il n'est pas une réforme religieuse, politique ou sociale, que nos pères n'aient été forcés de conquérir de siècle en siècle au prix de leur sang, par l'**insurection** »というエピグラフが掲げられている。あらゆる改革は反乱によってのみ獲得されるという，暴力革命肯定ともとれる考えは『民衆の秘密』をそれ以前の「社会主義小説」と異なった性格のものにしている。『パリの秘密』の主人公Rodolphe de Gerolsteinはゲロールシュタイン公国の領主だったし，『さまよえるユダヤ人』のAdrienne de Cardovilleは貴族であった。彼らは特権的な階級に属しながら，あるいは特権を保有しているがゆえに貧しい労働者に救済の手を差し伸べることができた。しかしそそうした解決手段は，現実のなかでは幻想にすぎないという認識のうえに『民衆の秘密』の世界が成立しているということができるだろう。これは，二月革命期の挫折を経験する過程でシューが学んだ教訓であった。

『パリの秘密』，『さまよえるユダヤ人』はともに予約購読者の大半が比較的裕

福なブルジョワ層に限定されていた新聞に連載された。そこでシューは，特権者にむかって労働者階級の置かれた社会的経済的状況を説明し，「危険な階級」にたいする理解と憐愍を訴える，労働者階級の代弁者の役割を演じていたのだ。だが『民衆の秘密』は反対に，二月革命に希望をつなぎながらも，その破綻していく状況を目の当たりにしているパリの労働者に向かって語りかけるのである。

III

先に引用した「読者への手紙」のなかで，シューは祖先の受難の歴史を知ることの重要性を強調していた。だが同時に，彼は祖先の偉大さを知ることの重要性も忘れていない。シューは第2章で，古代ゴール人が実現していた理想的な社会を描き出している。勇敢ではあるが平和を愛し，陽気で話し好きな人性。スポーツと労働によって鍛えられた健康な肉体。共同作業による効率的な農作業と公平な分配。共同体内部の相互扶助。部族，家族の絆，友情の尊重。そして民衆の宗教，ドルイド教。ピタゴラスに哲学を教授するほど卓越した学識を持っていたドルイド教の僧は，カトリックの僧侶のような排他的特権階級をつくるのでなく，市民社会に溶け込んでいる。そればかりか，シューはジャン・レーノーを引用して，共和主義がゴール人の精神に深く根付いていたとまで書いている[4]。

こうして，古代ゴール社会の描写に，19世紀パリの下層労働者階級から奪われたあらゆるものが列挙される。この楽園としての社会は，未来において実現されるべきユートピア社会の鏡像なのである。1900年間のゴール人の戦いは失楽園回復の運動でもあるのだ。進歩とは過去の黄金時代を目指すものなのである。明らかにキリスト教的な歴史ヴィジョンによって育まれたこのヴィジョンは，しかし失墜－贖罪－救済という宗教的な図式に還元することができない。ゴール人が楽園から追放されたのは，自ら犯した罪によるものではなく，ローマ人，フランク族の侵略という外在的な理由によるものだったのだ。したがって楽園の回復は外在的要因を排除することによって，つまり「侵略者」の末裔たる支配者階級を倒すことによってのみ可能なのだ。

しかし『民衆の秘密』のなかで，ついに楽園の回復は実現されない。この長大な作品は，延々と民衆蜂起の失敗と挫折を繰り返すのみである。古代社会の陽気な描写とそれに続く陰惨な戦いの描写はあまりに対照的である。このことがらルイ・ナポレオンのクーデタがシューに与えた失望の大きさを推測することができるだろう。クーデタ以前に執筆された第1章の挿話を思い起こそう。二月革命の騒乱のなかでMarik Lebrennは，革命派に捕えられ，危うく銃殺されそうなPlouernel伯爵を救い，その翌年，伯爵はMarikを監獄から救い出したのだった。ここには10世紀以来の宿敵の和解が仄めかされている。六月暴動を始めとする革命の危機のなかでも，微かな希望は生き延びていたのだった。だが，クーデタ以後に執筆された部分では非

業の死，拷問，凌辱といった陰惨な場面が前面に押し出される。全体は暗い雰囲気に覆われるのである。

IV

しかしこの失望からシューは，あるいは『民衆の秘密』の登場人物たちは，別の次元の価値を産み出したように思われる。それを理解するためには，ドルイド教の役割をもう少し詳しく見る必要がある。

作品の個々の挿話のなかで，必ず何人かの登場人物は，同胞を救うために，あるいはゴール人の独立を実現するために，死んでいく。しかし彼らは，すべて来世での復活を信じて幸福のうちに死んでいくのだ。ドルイド教の巫女Hênaはカルナック族を救うために，火刑台に上り，自ら神への捧物となる。5世紀の殉教者オディールは，凌辱と拷問を受けて死んでいく。カトリック教会の陰謀に敗れたジャンヌ・ダルクも，魔法使いメルランも，来世での復活を信じながら死んでいく。Marik Lebrennは二月革命のバリケードのなかでも，死を恐れることはない。ドルイド教徒にとって本当の死は存在しないからである。

> Vous le voyez, où d'autres pâliraient d'effroi, nous sourions avec sérénité. Pourquoi? Parce que la mort n'existe pas pour nous, parce que, élevés dans la croyance de nos pères, au lieu de voir dans ce qu'on appelle la fin de la vie je ne sais quoi de lugubre, d'effroyable, qui éteint à jamais l'existence dans des ténèbres éternelles, nous ne voyons, nous, dans la mort que ceci : aller retrouver ou attendre un peu plus tôt, un peu plus tard, ceux que nous aimions, et nous réunir à eux de l'autre côté de ce rideau qui, pendant la première période de notre vie ici-bas, nous cache les merveilleux et éblouissants mystères de nos existences futures, existences infinies, variées, comme la puissance divine dont elles émanent. En un mot, nous ne cessons pas de vivre : nous allons vivre ailleurs, dans des pays inconnus.[5)]

ここで述べられている霊魂の不滅性という思想は，古代ゴール人のみならず，19世紀の神秘主義的潮流のなかで広く信じられていた。とくにピエール・ルルーやジャン・レーノーをはじめとするロマン主義的社会主義者にとっては，彼らのコスモロジーを構成する主要な観念のひとつであった。シューもレーノーの転生説を引用しながら，作品のなかに取り込んでいるのである。だがシューは決して神秘主義者ではない。彼は登場人物が死に直面したときに，彼らの口を通じて不死への信仰を語らせる。だが作品のなかで魂の不滅性を巡って思弁的な議論が展開することはないし，また実際に死んだ人物が蘇るといったファンタスティクな出来事も起こらない。この作品における魂の不滅性は，形而上学的なものでも，神秘主義的なもの

でもなく，登場人物の倫理的なあり方の隠喩的表現としての価値を担っているように思われる。なによりも，不死の信念は登場人物に死を恐れない勇気とを与えている。

1900年間にもわたって，Lebrenn家の人々は敗北し続ける。だがこの永遠の敗北者は，同時に永遠の闘士でもある。『民衆の秘密』の登場人物もそしてシュー自身も，現実に何度も裏切られながらも，夢の実現を頑固に信じ続けることで，愚直な偉大さとでも呼ぶものを獲得したように思われる。

祖先の記録を読み終わった1851年12月１日の夜，Marik Lebrennは自分に逮捕状が出されるという情報を得る。彼は次の言葉を残して，逃亡する。

> L'idée révolutionnaire couve à cette heure sous la terre et gagne en profondeur par mille rameaux souterrains ; tôt ou tard, plus tôt que plus tard, l'on verra soudain sa dernière et irrésistible explosion et sur les débris du vieux monde, s'établir un société nouvelle.[6)]

地下深く，密かに枝を延ばす革命思想。このイメージからは，1848年の勝ち誇った，楽天的な調子は消えている。これが，二月革命の理想に頑固なまでにしがみつき，それゆえ歴史という苛酷な現実に敗北し続けたウジェーヌ・シューが獲得したヴィジョンである。それはすでにZolaの*Germinal*を予告し，次の時代のプロレタリア文学に固有の想像力の原型となるものではなかろうか。

注

1) 使用テクストはEugène Sue, *Les Mystères du Peuple*, Paul Vesiner, Lausanne 1850-1859, 12 tomes. なお18の章題は以下のとおりである。

I. Le Casque de Dragon-L'Anneau du forçat ou La famille Lebrenn. 1848-1849
II. La Faucille d'or ou Hêna la vierge de l'île de Sên. an 57 avant Jésus-Christ
III. La Clochette d'Airain ou Le Chariot de la mort. an 56 à 40 avant Jésus-Christ
IV. Le Collier de fer ou Faustine et Siomara. de 40 avant Jésus-Christ à l'an 10 de l'ère chrétienne
V. La Croix d'argent ou Le Charpentier de Nazareth. de l'an 10 à 130 de l'ère chrétienne
VI. L'Alouette du casque ou Victoria, la mère des Camps. de l'an 130 à l'an 395 de l'ère chrétienne
VII. La Garde du poignard. Karadeuk le bagaude et Ronan le vierge. 375-615
VIII. La Crosse abbatiale ou Bonaik l'orfèvre et Septimine la cokiberte. 615-793
IX. Les Pièces de monnaie karolingiennes ou Les Filles de Charlemagne. 727-814
X. Le Fer de Flèche ou Le Marinier parisien et La Vierge au Bouclier. 818-912
XI. Le Crane d'enfant ou La fin du monde. Yvon-le-Forestier. 912-1042
XII. La Coquille du pèlerin ou Fergan-le-Carrier. 1035-1147
XIII. Les Tenailles de fer ou Mylio-le-Trouvère et Karvel-le-Parfait. 1140-1300
XIV. Le Trépied de Fer & La Dague ou Mahiet-L'avocat d'armes. 1300-1428
XV. Le Couteau de boucher ou Jeanne-la-pucelle. 1412-1534
XVI. La Bible de poche ou La Famille de Christian l'Imprimer. 1534-1610
XVII. Le Marteau de Forgeron ou Le code Paysan. 1610-1715
XVIII. Le Sabre d'honneur ou Fondation de la République française. 1715-1851

2) L'auteur aux abonnés, tome I, pp.179-180
3) フーリエ主義者Alphonse Toussenelが反ユダヤ主義的な*Les Juifs, Rois de l'Époque*を出版したのは1845年のことであった。
4) Avant de former une grande république fédérative, la Gaule avait été constituée en royauté. « Mais (dit Jean Raynaud, article *Druidisme*), le *principe républicain* était si fortement implanté dans le génie de la Gaule, que celui de la royauté ne put jamais en triompher et ne prit place dans la nation que *par l'étranger* .», tome I, p.198 (note 1)
5) tome I, p.93
6) tome XII, p.186